



# ストリートハラスメントへのバイスタンダー介入

## —痴漢被害予防と阻止のために—

性暴力のない社会に向けて考えたいことの一つに、電車や道路など公共空間における痴漢等のストリートハラスメントがあります。被害の予防と阻止にむけて、居合わせた第三者が介入することが大切だと言われています。介入のための研修などを手掛ける一般社団法人ジェンダー総合研究所共同代表の濱田 真里（はまだ まり）さんと安藤 真由美（あんどう まゆみ）さんに介入方法や取り組み方についてご紹介いただきます。

### ストリートハラスメントとは

公共の場で起きる嫌がらせや迷惑行為をストリートハラスメントと呼びます。例えば、卑猥な言葉をかけられる、しつこく付きまとわれる、道を塞がれる、痴漢をされる等の行為です。被害を訴えても「気にし過ぎ」「褒めただけ」「そんな恰好をしているから」といった被害者の発言が矮小化されたり、責めるような反応を受けたりすることがあります。

### バイスタンダーの介入方法

こうした被害の予防と阻止のためには、その場に居合わせた第三者（バイスタンダー）による介入が効果的です。介入といっても、必ずしも加害者と直接対峙する方法ばかりではありません。必要に応じて他の人と動いたり、記録をとったり、場の空気を変えたりするなど、様々な方法があります。ジェンダー総合研究所では、5つの介入方法として「たすけを求める」「よりそう」「レコーディング」「まちがいを指摘」「すり替える」を紹介しています。5つの頭文字をとった「たよれます™」の語呂合わせで、ぜひ覚えてみてください。

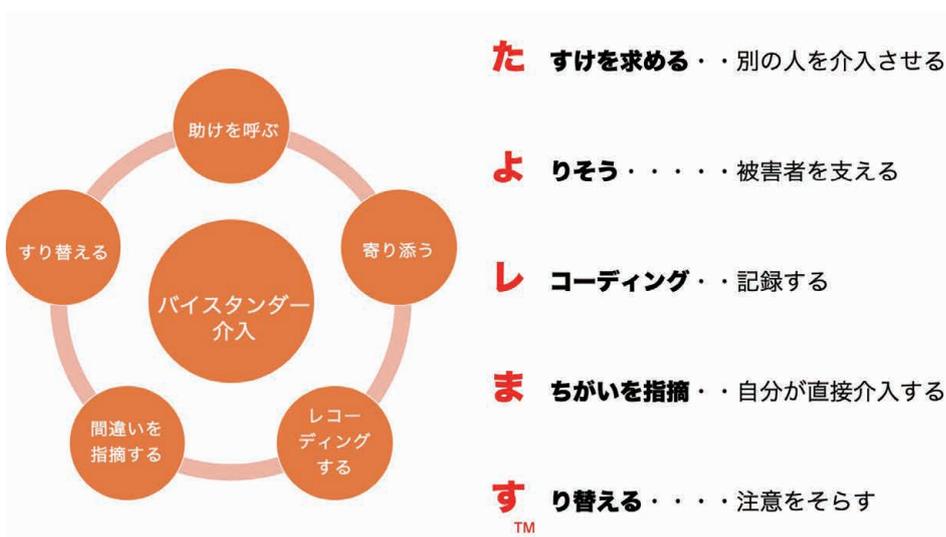
### 介入する際に大切な3つのこと

介入の際に大切な1点目は、被害者に寄りそうことを最優先に考えて行動するということです。被害を受けている人がいても、「加害者にも言い分があるのかもしれない」と考えたりして、行動するのに悩む方もいるかもしれません。しかし、加害者側に何か理由があるとしても、そのことが他人に暴力を振るったり傷つけたりしてよい理由にはなりません。まずはその場で被害を食い止めること、防止することを考えることが重要です。

2点目は、介入によって根本的な問題解決が必ずしもできるわけではないということです。特に、ストリートハラスメントのように加害相手が見知らぬ人の場合に、加害者自身をその場で変えるような働きかけは不可能に近いです。そのことを理解した上で、発言や行動を選択しましょう。

3点目は、その場の状況や自分自身の経験値に合わせて、適切な介入方法を探ることです。介入をしようと思っても、知らない人に声をかけるだけでも躊躇<sup>ためら</sup>ってしまう方もいます。常に自分自身や周囲の安全を確保しながら、無理のない範囲で対応してください。ひとりでは

なく、周囲と連携しながら行動したり、いくつかの介入方法を組み合わせたりすることも可能です。また、介入は突然できるようになるわけではありません。防災訓練のように練習やイメージトレーニングをしたり、介入方法を事前に知っておいたりすることが、とっさに動けるようになるためには重要です。



## 電車内の痴漢に遭遇した際に

では、具体的なバイスタンダーの事例として、電車内での痴漢について考えてみましょう。「痴漢のような現場に遭遇したけれど、どうしたらいいのかわからなかった」という方は多いのではないのでしょうか。私たちが主催するバイスタンダー講座の参加者からも、こういった声をいただくことが何度もありました。たとえば、被害に確信を持っていない場合は、被害者に対して「場所を変りましょうか」「こっちの方が空いていますよ」と声をかけることができます。これは、被害者から注意をそらす「すり替える」に当てはまります。もし、被害者への直接の声かけはハードルが高いという場合は、警視庁の防犯アプリ「Digi Police」（デジポリス）が便利です。「ちかんされていませんか？」と書かれた画面を、被害者に無音で見せられる機能があります。また、自分が痴漢被害に遭っている場合は、アプリ画面をタップすると「やめてください」という音声を出すことができます。突然、目の前で介入が必要な場面に遭遇しても、すぐに適切に動けるとは限りません。こういった声かけや対応方法、ツールを事前に知っているだけで、バイスタンダーとして動きやすくなります。



デジポリスの表示画面

## 痴漢のない社会に向けて

痴漢は1日の中でかなりの被害数がある性暴力であるにも関わらず、これまで解決に向けての大きな動きはありませんでした。しかし、国も動き出し、今年2023年の3月30日に政府による「痴漢撲滅に向けた政策パッケージ」が公表されました。その中には「被害申告・相談をしやすい環境の整備（被害に遭った際や目撃した際にとることが望ましい行動の周知）」といった、目撃者

への行動を促すための取り組みも含まれています。痴漢の被害者は恐怖で動くことができなかつたり被害者本人による訴えだと疑われやすかつたりするので、自分で声をあげて助けを求めることは容易ではありません。一方、被害を受けている本人だと言いつらいことも、第三者であれば言える場合もあります。痴漢を目撃した時に動ける人が増えていけば、今の状況が変わっていくはずで

## 性差別を見過ごさない社会へ

私たちが開催するバイスタンダー講座では、参加者の方たちに毎回「これまでに目の前の人を助けたいのに助けられず、後悔したことがありますか」という質問をしています。「後悔している」、「あの時自分が動けていれば……」という思いを持っている回答者がほとんどです。介入することは難しいことのように思われがちですが、「大丈夫ですか？」と被害者に一言声をかけるだけでも、助けになることがあります。直接的ではなく間接的な介入など様々な方法があるので、難しく考えずにまずは小さな一歩を踏み出してみる事が大切です。「見て見ぬふりをしない人」が増えることで、差別やいじめ、ハラスメントなどをしづらい社会、助けを求めやすい社会になってほしいと思います。

### 執筆者プロフィール

はまだ まり  
**濱田 真里**さん（ジェンダー総合研究所 共同代表）

専門は政治分野におけるハラスメント。2021年に女性による女性議員・候補者の選挙サポートを行う団体 Stand by Womenを設立。これまでに100人以上の議員や候補者に対するハラスメントの相談対応を実施。2023年に日本初の議員向け相談窓口「女性議員のハラスメント相談センター」を設立。



あん どう ま ゆ み  
**安藤 真由美**さん（ジェンダー総合研究所 共同代表）

エグゼクティブコーチ/コンサルタント。得意分野は企業分析、組織論、ジェンダー論、DEI、等。ファンドマネージャー/アナリストとして長年、企業分析と投資に従事した経験をいかし、「コーチング×お金×ジェンダー」を切り口に、誰もが生きやすい社会を目指して活動中。2018年よりプリリアントライフ代表。



## バイスタンダーをめぐる障壁と乗り越えるためのステップ —職場でのハラスメントを例に—

職場でハラスメントや性差別的なふるまいに遭遇した場合に、その場に居合わせた人が助けた方がいいと思っても介入をできにくいのはなぜでしょうか。日々の仕事の場面だからこそ、人間関係などが障壁となって躊躇<sup>ちゅうちよ</sup>することはありませんか。被害の予防と阻止にむけて、臨床社会学、男性・マジョリティ研究をされている西井 開（にしい かい）さんに介入の障壁やその乗り越え方についてジェンダーの視点を踏まえてご紹介いただきます。

### 職場でのハラスメントに介入する難しさとは

職場でハラスメントや差別行為、いじめなどが起こった時、その周囲で見ている人たち（バイスタンダー）が何もできないという経験はないでしょうか。これらの暴力行為は、上司から部下、教員から生徒など、上下関係をもとに繰り出されることが多く、被害者がなかなか抵抗できなかつたり逃れたりすることが難しいケースが少なくありません。それゆえ第三者であるバイスタンダーの存在は、暴力を防止する上で大きな役割を果たします。バイスタンダー介入のことを考えるために、まず、いくつかの事例を考えてみましょう。

#### ■ 事例1

あなたはある企業の社員です。同期の女性社員が男性の上司である部長に仕事の報告をしたところ、こんなふうに言われている場面に出くわします。

部長 「うーん、内容はいいんだけど、君、もうちょっと愛想よく話せないの？ 女なんだからさ、もっとニコニコしてくれてないと、社内の雰囲気が悪くなるでしょ？」

女性社員 「いや、私が笑顔でいることと仕事の内容って関係ありますか？」

部長 「そりゃ、あるだろう。いやだなあ、女性はすぐ感情的になって、冗談も通じないんだね」

女性社員の顔はひきつり、明らかにショックを受けていますが、部長はそのことに気がついていないようです…。

#### ■ 事例2

あなたは企業の管理職です。別の部署の女性社員から伝えたいことがある、と言って相談を受けました。彼女の話の聞くと、同じ部署の男性上司からしつこく食事に

誘われて困っているということでした。直属の上司に相談したところ「食事くらいいいじゃないか」と言われてしまって解決が見込めず、相談しにきたようです。あなたはどのように応答したらいいのか悩みます…。

これらの事態に遭遇した時、あなたならどのように対応するでしょう。適切に対応できればいいのですが、これまでの研究によってバイスタンダー介入にはいくつかの障壁が存在することが示されています。本稿ではその障壁を整理するとともに、どのように乗り越えることができるか考えたいと思います。

### バイスタンダー介入の障壁

#### 1. 傍観者効果

介入できない要因の一つに傍観者効果と呼ばれるものがあります。他にもバイスタンダーがいる場合、「他の人が動いてくれるだろう」という意識が生まれて、なかなか動き出せないのです。

#### 2. ショックで動けない

いじめやハラスメントが目の前で展開された場合、それは被害者だけではなく傍観者にも少なくないショックを与えます。今起こっていることが問題であることはわかるのだけれど、ショックで体が硬直してしまってなかなか動き出せないということが起こります。この現象は「麻痺<sup>まひ</sup>」と呼ばれ、多くの人が体験しています。

#### 3. 何が起きているかわからない

何か不穏な出来事が目の前で起きているのは感じ取っているけれど、それがハラスメントや性差別にあたるかどうか判断できず、動き出せないということがあります。例えば〈事例1〉のケースで言えば、女性社員に対

する部長の発言は、相手が「女性」であるという理由で笑顔を求め、「感情的」と見なしている点で、美的消費、二流市民扱いという性差別にあたります。こうした知識を持っていないとなかなか問題を問題として捉えることができません。

#### 4. 加害者との関係性ゆえに介入できない

わかりやすいのは、会社の上司など加害者が自分よりも目上の存在である場合です。もし相手に何か指摘してしまったら、今後自分に不利益が及ぶかもしれないと不安になって介入しにくいという事態が起こります。それ以外にも、加害者が家族や友人で指摘しにくい場合もあるでしょう。

#### 5. 加害者の反発が怖くて何もできない

バイスタンダー介入をした場合、加害者の反発を招いてしまう懸念から動き出せないということもあると思います。多くの加害者は自分の行いが差別やハラスメントにあたるとは思っていません。だからこそ、それが問題であると指摘された場合、抵抗的な反応を示すことが想定されます。不安や恥、戸惑い、罪悪感の感情が巻き起こり、時に怒りをあらわにすることもあります。また、こうした感情を回避するために、「むしろそんなことを言われた自分が被害者だ」という被害者意識に囚われたり、「自分を怒らせた相手が悪い」と被害者に責任を帰したり、「差別は悪人がするものであって自分がした行

為が差別にあたるはずがない」という自己免責的な思考に陥ってしまうことも少なくありません。

刑罰に処されるべき事態を除き、加害的な行為をしてしまった人がとるべきは丁寧な謝罪と償い、そして再発防止です。しかし、こうした抵抗の感情や認知に囚われると適切な対応を取ることができず、指摘を無視する、黙り込む、言い訳する、「不快な気持ちにさせて申し訳なかった」という自分の非を認めない適当な謝罪をする、逆ギレするといったように、二重に加害的なふるまいをしてしまう可能性があります。こうした防衛的な反応に巻き込まれることを避けるために、バイスタンダーは見て見ぬふりをしてしまうリスクが考えられます。

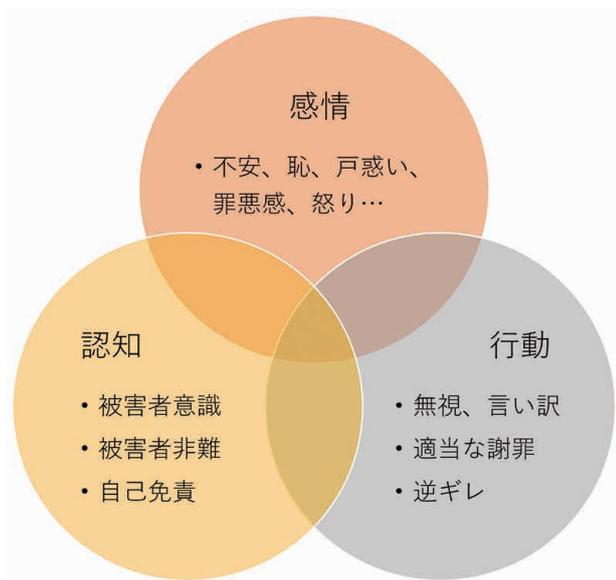
#### 6. 自分の組織を守るために問題化しない

〈事例2〉のような場合ならば、自分の組織を守ろうという意識がはたらいってしまって被害者をサポートしない選択がとられかねません。ひどい場合は、被害者ではなく逆に加害者の立場を慮って、被害者非難を始めてしまうケースもあります。「彼にも将来があるんだから」「彼みたいな良い人がそんなことをするはずがない」「これ以上問題を大きくすると会社に迷惑がかかるよ」といったように、被害者を黙らせてしまう。これを二次加害と言います。

#### 7. ジェンダーに関する神話の問題

二次加害が起きてしまう背景には、ジェンダーをめぐる様々な神話の存在が挙げられます。例えば、性暴力の文脈において、「被害者の女性が十分に自衛していなかった」「露出の多い服装を着て誘っていた」「性暴力は路上で起きるものであって、顔見知りの中で起きるはずがない」といった誤った情報や、被害者の責任を追求するような言説がまだ数多く生き残っています。これらをレイプ神話と言います。また、「脳の構造的に女性は感情的で、男性は論理的である」「人類の歴史的に男性が外で働いて女性が家を守るのは当然のこと」といったニセ科学も存在し、こうした神話が女性を二流市民扱いする意識につながっていきます。

これらの神話に疑いを持っていなければ、目の前で性差別が起きたり、セクハラ相談を受けたりした時、適切に対応することができず、むしろ加害者を擁護するような発言につながるリスクがあります。



抵抗のメカニズム

## 8. 介入の方法がわからない

介入の障壁として、介入をしたくてもその方法がそもそもわからないということも挙げられます。それゆえ、ひとまず事態を沈静化させるために被害者に我慢を強いるということも起きかねません。特に男性のバイスタンダーの場合、介入をするには加害者と直接的に対峙し、相手をやりこめることばかり考えてしまうことが研究で明らかになっています。しかし、先ほど挙げたように相手が上司だったりすると、直接の指摘は困難です。

### バイスタンダー介入を支えるもの

以上、バイスタンダーの介入行動を妨げる障壁について紹介してきました。これらの障壁は複合的に絡み合い、私たちが暴力的な場面に介入する動きを妨げてしまいます。では、バイスタンダーが問題に対して適切に対処するには何が必要なのでしょう。いくつかのステップを紹介していきたいと思います。

#### 1. 正確な知識を持つておく

まず重要なのは性差別や暴力に関する正確な知識を持つておくことです。世間に流布する言説は前述したように神話である場合が多く、それを素朴に信じていると被害者の傷つきや抑圧に気がつくことができず、下手をすれば二次加害を犯してしまうリスクもあります。どのような言葉やふるまいが女性やマイノリティを見下し、押さえつけ、社会から排除することにつながるのかを理解しておくことが大切です。

#### 2. 介入の方法をいくつか持つておく

やり方を知っていなければ行動に移すことはできません。また、上述したように加害者に直接注意するという手段だけしか持つていない場合、いざと言うとき動けない場合もあります。そのためいくつかの介入方法を知ることが重要です。前半の記事では「たよします™」という内容で紹介されていますが、ここでは「RIGHT TO BE」というアメリカの人権団体の5つの介入方法「5つのD」を紹介します。

- ① **Direct (直接介入する)** : 加害者に注意をする。  
「ちょっと、今のはどういう意味?」「それはとても無礼です。どうして彼らをそっとしておかないんですか?」と声をかける。
- ② **Distract (気をそらす)** : ハラスメントの激しさから注意をそらし、状況を和らげる。例えば、コーヒーカップを落としたり話題を変えたりして全員の注意をそらす、ハラスメントを受けている被害者に話しかけて別の場所につれていくなどをすることで、安全な空間を築く。
- ③ **Delegate (助けを求める)** : 協力してくれる人を探す。隣にいる人に声をかけ、状況を記録してもらい、直接介入してもらい、状況を監視している間にマネージャーを呼んで来てもらうなどする。また、ハラスメントを受けている人に確認して、学校の教師や職場の上司、ハラスメント窓口、その他の支援団体や警察に協力を依頼する。
- ④ **Document (記録する)** : 写真や動画の撮影、音声の録音、メモへの記入などして記録する。オンライン上でのハラスメントならばスクリーンショットでもいい。最終的に被害者に手渡す。
- ⑤ **Delay (後でフォローする)** : ハラスメントが発生した後に、ハラスメントを受けた人の様子を確認する。ハラスメントが起きて何もないうちに過ぎ去ってしまえば、被害者は周囲の人も加害者に同意していたと思ってしまう。「大丈夫でしたか?」「私は見ていました」「何か必要なことはありますか?」と声をかける。

以上のように、直接介入以外にも、私たちができることは数多くあります。場面に応じて使い分けると良いと思います。

① <b>Direct (直接介入する)</b>	・ 加害者に注意をする、問題性を指摘する。
② <b>Distract (気をそらす)</b>	・ コーヒーカップを落とす、大きな声をあげる。
③ <b>Delegate (助けを求める)</b>	・ 職場の上司など協力してくれる人探す。
④ <b>Document (記録する)</b>	・ 写真や動画の撮影、音声の録音、メモへの記入などして記録する。
⑤ <b>Delay (後でフォローする)</b>	・ ハラスメントを受けた人の様子を確認し、フォローをする。

5つのD

また〈事例2〉のように被害者から相談を受けた際は、その経験を否定したり、被害者の責任を追求したりせず、まずその被害の深刻さを受け止めることが重要です。次に、相手が求めていることを聞き取った上で、適切な相談機関を紹介して場合によっては連携する、自分にできることを考えて実行に移す、といった行動をとると良いと思います。その際、自分の思いだけで勝手に動いてはいけません。相手が何を求めているのか、問題について誰になら共有していいかなど、相手の状況やニーズを正確に把握してから行動に移るべきでしょう。

### 3. 直接介入のための言葉を仕入れておく

直接介入にも様々な方法があり、単に相手を強く制したり叱ったりするだけが手段ではありません。相手との人間関係(上下関係、今後もつながりがあるのか)、一対一で言うのがいいのかどうか、言い方次第でさらに差別を誘発するリスクなどを考慮しつつ、様々な伝え方を事前に知っておくと対応しやすくなります。以下ではダイバーシティ教育の研究者であるダイアン・J・グッドマンの『真のダイバーシティをめざして』(上智大学出版、2017年)という本の中で紹介されている表現方法をいくつか紹介します。

- 相手の発言を別の言葉で言い換える、オウム返りする、「つまりあなたは～と考えているんですね」と要約して返す、さらに詳しく質問するなどによって、発言の問題性に気づいてもらう。
- 「～のように考えるきっかけは何だったんでしょうか?」「本当にそうですか?」と相手の発言について再検討を促す。
- 「～で腹が立っているのはよくわかります」と言って最初に共感を示してから問題を指摘する。
- 相手の差別的ジョークに対して、わからないふりをすることで無効化する。
- 「女性は感情的だ」といったステレオタイプに対して反例を提示して疑問を投げかける。
- 不適切な行為や差別的発言を禁止する組織の方針や法律を指摘する。
- 「もし誰かがあなたの家族に対してそんなふうには言ったらどう思いますか?」と言って相手の共感を引き出す。
- 「あなたのように頭のいい人がそんなことを言うとは

…」と言って問題に気づいてもらう。

- 例えば組織の中で誰かが排除されそうな場合、「あの人がいれば～のような利益がありますよ」などと言って、相手の利益になることを伝える。
- 「そんなこと言われるのは嫌です」「あなたがそういうと辛くなります」など自分の気持ちを伝える。
- 「私も以前は～でしたが、それはどれだけ人を傷つけているか気づきました」と自分の成長過程を紹介する。

### 4. 仲間をつくる

バイスタンダー介入を自分一人だけで行うのは大変です。介入しようにもなかなか勇気が出なかったり、行動に移すことができなくて罪悪感にさいなまれ、一人で落ち込むことになる、なんてこともあるかもしれません。企業や学校など自分の所属する組織の中で、普段からジェンダーや差別に関心のある人たちとの関係をつくっておくといいと思います。ハラスメントが起きた時、チームワークを活かしながら介入したり、その後の対応を話し合うことができるでしょう。

### 5. 練習する

バイスタンダー介入の手段や知識を身に着けたら練習をしておくことを勧めています。ハラスメントに出くわした時「麻痺」して動けなくなる事態をできるだけ避けるためです。仲間たちとロールプレイなどを通していくつかの手段を試してみてください。

以上、バイスタンダー介入の障壁と、それを乗り越えるための手段についてまとめました。多くのアクティブ(行動する)バイスタンダーが生まれることを願っています。

#### 執筆者プロフィール

#### にし かい 西井 開さん

立命館大学大学院人間科学研究科博士後期課程修了。博士(人間科学)。現在千葉大学社会科学研究院特別研究員。臨床心理士。公認心理師。専攻は臨床社会学、男性・マジョリティ研究。立命館大学人間科学研究所男性問題相談室(DV加害者更生カウンセリング)所属。モテないことに悩む男性たちの語り合いグループ「ぼくらの非モテ研究会」発起人。著書に『「非モテ」からはじめる男性学』(集英社新書)がある。



おすすめ図書・動画

今号のテーマにまつわる、リーブラの図書資料室の本やYouTubeで見られる動画を紹介します。リーブラの所蔵図書は、港区の図書館カードで借りることができます。ぜひご利用ください。

BOOK



『クロコダイル  
ワニみたいに潜む日常のハラスメント  
と性差別、そしてその対処法』

トマ・マチュー [作]  
リポアル堀井なみの・コザ・アリーン [訳]  
(かもがわ出版)

本書は、女性が路上で遭ったセクハラや性暴力の経験や日常の性差別をもとに描かれたベルギーの漫画です。車に無理に引き入れようと腕をつかむ、露出のある服装に対して誘惑的だと声をかけるなど、様々な事例や対応を紹介しています。

男性がさほど悪いと思っていない軽くとらえている行動は、女性の目線で見ると、日常生活にワニのように「潜んだ」セクハラ、暴力であり、「いつ出会うかわからない」恐怖、緊張につながっています。ストリートハラスメントに関する数少ない図書で、本号で紹介しきれなかったハラスメント・性差別の事例も多く扱っており、理解が深まるお勧めの1冊です。

MOVIE



YouTube動画  
「#ActiveBystander=行動する傍観者」  
【性教育YouTuber】シオリヌYouTubeチャンネルより  
<https://www.youtube.com/watch?v=sp1e9hKZ97w>

前半は、盗撮や通りすがりの痴漢などの性被害を目の当たりしても、行動を起こせず目をそらしてしまう第三者が描かれ、後半は、被害者への手助けや被害を防ぐ方法など、アクティブバイスタンダーの行動が紹介されている約2分の動画です。

被害者の拒否や予防が難しいことを示し、「第三者の介入」の必要性を訴える内容に、「リアル過ぎて泣けてくる」「寄り添ってくれる人がいたらもっと救われた」という女性の声、「自分にもできることが分かった」という男性の声など、多くの肯定的なコメントが寄せられています。

動画で見ることで、被害者が1人で困っている様子やアクティブバイスタンダーが性暴力をなくしていくと勇気をもってアクションを広げていく様子などが伝わってきます。具体的なアクティブバイスタンダーの行動が知りたい方にお勧めです。

MOVIE



戸板女子短期大学(港区)の学生会が警視庁防犯アプリ「Digi Police (デジポリス)」の痴漢撃退機能、防犯ブザーの使い方などを動画で紹介しています。2022年にデジポリス普及に貢献したとして、警視庁から感謝状が贈られました。

YouTube動画  
「戸板女子短期大学学生が痴漢撃退アプリ「デジポリス」紹介動画を作成!!」

戸板女子短期大学公式YouTubeチャンネルより、  
<https://www.youtube.com/watch?v=gc-JXvkLIBQ>

今月の表紙



◀グランプリデザイン  
「Hand to Hand」

「アクティブバイスタンダーバッジ」

慶應義塾大学の学生有志による同大学未公認団体「Safe Campus」が「学校から広めようアクティブバイスタンダーバッジコンテスト」を2021年に開催し、作成。グランプリ作品は、性暴力のない社会の実現のため、一人ひとりがバイスタンダーになる意識を高め、連鎖的に広げていってほしいという願いが込められています。

港区立男女平等参画センター リーブラ

〒105-0023 港区芝浦1-16-1 みなとパーク芝浦  
Tel:03-3456-4149 Fax:03-3456-1254  
▶<https://www.minatolibra.jp/>



アクセス

- JR「田町駅」東口(芝浦口) 徒歩5分
- 都営地下鉄浅草線・三田線「三田駅」A6出口 徒歩6分
- ちいばす ◆芝ルート・芝浦港南ルート「みなとパーク芝浦」 徒歩0分  
◆芝浦港南ルート「芝浦一丁目」 徒歩4分
- 都営バス(田92・99)「田町駅東口」 徒歩6分



港区男女平等参画情報誌「OASIS オアシス」79号 2023年10月発行  
発行：港区立男女平等参画センター 指定管理者 株式会社明日葉